

火を焚き、自然の恵みを頂く暮らし

このボロ家にヨメひとり、暮らしはどうするか？畑仕事をする人がいないと農家とはいっても野菜ひとつない。そもそもこの家の畑がどこなのかもわからない・・・と案じていると、間もなく雑草が背丈ほども伸びて隣の畑との境界は遠くからでもはっきりと区別できるようになった。農村の風景は農民が作っているという意味を理解した。男の専売特許らしい草刈り機の使い方を近所の人に教わり、しばらくは合間を見て雑草との格闘が続いた。雑草にしか目がいていない私に、「梅がなってるよ」「アンズが食べごろ」「筍が時期だ」と教えてくれる人がいた。野菜作りも教わって何度かトライしてみたが、新参者が片手間でやってうまくいくほど甘くはないことが程なくわかり、放っておいても実ってくれるものを無駄にしないで使うことにした。春はふきのとうに始まり、タラの芽、浅葱、ニラ、蒨、筍、アンズ、梅、桑の実、柿、何の手入れもしなくても次々と食料を供給してくれ、自然の恵みという言葉を実感し実にありがたい限りである。



実ってくれたアンズ

次に田んぼはどうするか？これまで田植えや稲刈りは手伝っていたので、米作りならと取り組み始めたが、田植えや稲刈りの前の作業が重要だった。奥深さを知らないからできると言われるが、田んぼに入って作業しているだけで「偉い！」と近所の人々がほめてくれるのでその気にさせられてしまう。2年目の今年は田んぼの状態は惨憺たるものだったが、思いもかけず“うまい！”と絶賛の声が茨城と横浜から寄せられ、またまたその気にさせられて、今度は手で植えようかななどと考えている。はっきり言って米を作れば何故なのか赤字だが、知人に送ると喜んでくれるのでやめられそうもない。「米作りなんかもうやめたら？」と冷たく言い放っていた娘は結婚と同時に「米、米！」と一番多く消費している。息子はこの稲藁でしめ縄を幾つも作って知人に配るのを楽しみにしており、やはり米作りは奥が深そうだ。



しゃもじ型のしめ縄

この家でのもう一つの特徴は火だろうか。仙台での子ども時代、天気のいい休日に部屋

の掃除などをした後、家の前を流れる木流し堀の土手で焚火をした。龍沢寺のすぐ近くだった。土手には覆いかぶさるようにねむの木が茂り、花が咲くと桃のような甘い香りがした。ねむの花の香りと焚火のにおい、実に懐かしい。ちなみにこの豊かなねむの木は私が仙台を離れた直後、川岸の直立不動工事で消失していた。ここ養蚕農家では父が山仕事をするので薪が豊富だったこともあり風呂の改修時には薪でも焚けるようにしておいた。今は山仕事をする者はいないが、仕事柄大工さんの端材が時々でる。廃材でお風呂を沸かせるのはうれしい。それに古い台所には歴代の嫁たちの苦勞が浸み込んだようなかまどが残っている。不出来なヨメはまるでお寿司の合間にガリをかじるように、仕事の合間に紙くずなどを燃やして自分をニュートラルな状態にしてギアを切り替えている。ぼんやりと炎を見ながら紙くずが片付くのは気持ちがいい。この家での暮らし方がだいぶ定まってきた。